# 中国の太鼓文化：
# 上海市および山西省における調査報告


| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2017-10-03 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/28192 |

# 中国の太鼓文化——上海市および山西省における調査報告

野澤　豊一（金沢大学）

## Ⅰ　はじめに

本章では、中国の太鼓文化について、上海市と山西省での短期調査に基づいた報告を行う。調査方法および調査期間は次のとおりである。まず、2010年3月9日から15日にかけて、上海市で活動する太鼓チームの聞き取り調査を行った。このときの同行者は、ジョン・アートル氏（金沢大学外国語教育研究センター・准教授）と、通訳の周澤森氏（金沢大学人間社会環境研究科・院生）である。次に、2010年11月2日から9日にかけて、上海市と山西省新絳県で、太鼓チーム関係者らの聞き取り調査などを行った。このときの同行者は、神谷浩夫氏（金沢大学・教授）と、通訳の周澤森氏である。

以上からも明らかなように、調査期間自体はのべ2週間程度に過ぎないうえに、筆者は中国の地域および文化研究を専門としてない。そのため、十分な調査に基づいた資料の整理や、中国社会を取り巻く状況を土台にした論証も、ここでは行うことができない。そこで変則的ではあるが、以下では、調査を行った順序にほぼ沿ったかたちで調査内容を報告し、そのうえで日本の太鼓文化との簡単な比較を行う。それにより、現代的な民俗芸能のあり方における、日中の対照性や類似性が浮き彫りになればと思う。

## Ⅱ　上海の太鼓文化

筆者ら上海市の太鼓文化について、調査前に知り得た情報は、「絳州（じゃんじょう）鼓楽芸術団」という演奏の専門家集団と思しきグループと、通訳の周澤森君の友人が知っているという「社区」（中国の居住区）のグループがあるというとのみであった。これらの情報から、短期間のうちにできるだけ上海の太鼓文化について知ろうと思った筆者は、ひとまず上海で太鼓演奏を行っている人々の、技術的、教育的、生業的な専門レベルの幅を把握しようと考えた。調査をしてみた結果、「上海絳州鼓楽芸術団」のような完全なプロのグループと、社区のチームのような完全にアマチュアのグループ以外には、特定のグループのタイプは見つからなかった。したがって本節では、上海市の太鼓文化について「プロの太鼓グループ」と「アマチュアの太鼓グループ」に分けて、その活動や構成メンバーなどを報告することにする。

## 1　プロの太鼓グループ

### （1）現代的なライティングを多用した太鼓演奏

上海で芸能パフォーマンスが商売として成り立つようになってきたのは、1990年代のはじめからだという。それ以前からも改革開放政策で商業的な芸能活動はあったが、民間団体の活動は禁止されていたのだという。この、芸能ビジネスの自由化の傾向は、2000年以降さらに進んだ。

筆者らが訪れたプロの太鼓演奏グループは、「上海東絳州鼓楽団／上海絳州鼓劇院」および、「上海絳州鼓楽芸術団／上海龍魂打撃楽団」の２つであり、どちらもグループ名に「絳州」すなわち現在の新絳県の地名が遣われている。これは、両者とも、1988年に山西省運城市で結成された「山西絳州鼓楽芸術団」をその前身としている（もしくはそう自称している）ためである。詳しい経緯は後述するが、2000年に上海に進出した「山西絳州鼓楽芸術団」は、2009年に世界金融危機の影響で一度解散に近い状態に陥り、本拠地の新絳県に戻った。そのしばらく後に、上海に残った演奏家が新たなメンバーを加えて発足させたのが、上の２つのグループである。（うち「上海東～」の方は、新しいマネージャーがいる。）

上海には他にも 10 程度のプロのグループがあるというが、その多くが山西省新絳県から出てきたチームなのだというから、「山西～」と何らかの関係があると思われる（新絳県の調査については次節で述べる）。

これらの太鼓グループは、共通して、「現代的」な演奏方法と「伝統的」な演奏方法の両方を行う。現在上海で評判が良いのは「現代的な」太鼓スタイルで、その代表は「水鼓」と呼ばれるステージである。北京で始まったというこの演奏スタイルは、ライティングを多用したステージ・パフォーマンスで（写真１）、現在の上海市内での出演依頼の９割近くはこちらが占めているという。他にも、英国初で、打楽器やダンスや劇をおりまぜたエンターテインメント集団の STOMP に影響を受けたという演目もある。中国の大学生の要望で始まったというこの演奏スタイルは、カラフルなアフロ・ヘアーのかつらをかぶって、ポリタンクやドラム缶を打ち鳴らすというものである。

実際に筆者らが見ることができたのも、現代的な「水鼓」のステージであった。会場は上海市内の高級ホテル。上海の商工会が金曜日の夜に開いていた、パーティーでの演奏である。会場内はかなり豪華な雰囲気で参加者も盛装していたので、普段着のままの調査班の我々は、会場の隅の方にいたとはいえ、かなり場違いだった。出演は全員が 10 歳代後半の女性で、衣装は豹柄のノースリーブのワンピースの６人。演奏が始まる前に会場の照明が落とされると、胴も面も透明な太鼓から発される青や赤の光が、とても目立つ。演奏は大音量の BGM――かなり強烈なリズムにシンセサイザーが加わった、どことなく NHK の大河ドラマのオープニングを思わせるような音楽で始まる。（後からビデオで確認してみたところ、太鼓の音もすでに BGM に入っていたようにも聞こえた。他のビデオでは、日

本でも一時期流行した「女子十二楽坊」の曲を BGM に使用している演奏もあった。)出演者はそれに合わせて、髪を振り乱しながら大きなアクションで太鼓を叩いた。バチも光るという演出だが、さらに特徴的なのは、太鼓の表面には張られた水しぶきもそれと一緒に光るところであり、これが「水鼓」の呼称の由来である。3分間ほどの BGM が終わると、彼女らは挨拶をするでもなく、速やかにステージを降りた。このステージのギャラが、3千元（約4万5千円）であった。

写真１　現代的演奏スタイルの一つ「水鼓」
（上海東絳州鼓楽団の宣伝用写真より）

現代的な太鼓演奏の場合、大抵の曲にはこのような BGM がつくのだという。また、男性の出番がほぼゼロというのも、「水鼓」の特徴である。もう一つの演奏スタイルに「伝統的」と呼ばれるものがあるが（写真２）、こちらは上海ではあまり上演されない。外国人向けのステージで出番が多いということだが、筆者らも見ることはできなかった。

上海東絳州鼓楽団の仕事は民間と政府系の両方がある。前者には劇場出演、テレビ出演、高級ホテルの宴会場、工場のオープニング等々がある。2010 年に政府関連の仕事で大きかったのは、上海万博である。それに加えて、海外公演も多い（これは政府系の仕事ではないが、旅費は支給されるというもの）。台湾は通算で 80 回ほど行ったことがあり、他にも香港、マカオ、シンガポールなどで出演しており、近々アフリカにも行く予定だという。

写真２　伝統的な演目はあまり出番がない（上海東絳州鼓楽団の宣伝用写真）

（2）バックステージ

筆者らは上の演奏を見る前に、あらかじめ上海東絳州鼓楽団と上海絳州鼓楽芸術団のメンバーが共同生活をする拠点を訪れていた。どちらも、上海市の中心から地下鉄とバスで1時間半から2時間ほどのところ、住宅地からは少し離れた工場の立ち並ぶ一角であった。彼らの住まいも、以前は倉庫兼工員宿舎だったと思しき建物である。

上海東絳州鼓楽団の場合、住まいの1階は太鼓の倉庫になっていて、その奥に台所がある（写真3，4）。太鼓グループの若者たちは、全員その2階で寝起きしているのだというが、かなり狭くて寒い所である。これまでも騒音問題で何度も引っ越しをしてきたというが、ここに来てからは3年になる。

上海東絳州鼓楽団のメンバー数は、60人と非常に多い（権軍民氏は「かれら全員を食べさせる団長の責任は重い」と語った）。年齢は14歳から25歳で、平均すると18歳くらいだという。女性が3分の2を占めていて、全員が主に山西省を出身とする出稼ぎ者である。建物の廊下には、一日のスケジュールが書いてあったが（表1）、これをみるとそのハードさが分かるだろう。

写真3　倉庫内を案内する権団長（右）

写真4　倉庫の奥には台所がある

表1　団員の一日のスケジュール

| | |
|---|---|
| 基礎訓練（リハーサル） | 6：30～7：30 |
| 朝　　食 | 7：30～8：30 |
| 基礎訓練 | 8：30～11：30 |
| 昼休憩 | 11：30～14：30 |
| 基礎訓練 | 14：30～17：00 |
| 夕食＋休憩 | 17：00～19：00 |
| 勉強（読譜など） | 19：00～22：30 |

ハードなのは、出演スケジュールも同じである。ほぼ毎日何らかの出演依頼があるうえに、週末ともなると、一日に５つのステージに出演するということも普通らしい。また、誰がどのステージに出るかは、当日の朝にならないと分からない。たとえば、上で紹介した演奏が終わってから、筆者らは団員に簡単なインタビューを試みた。しかし、すでに夜も遅かったうえに（９時は過ぎていた）、その日５つのステージをこなしていた彼女らは、すでにかなり疲れ切っていた。「帰ってから読譜の勉強があって、明日も５時半に起床だ」と聞かされた筆者らは、やむなく引き下がることにした。

写真５　倉庫の外で練習をする上海東絳州鼓楽団の団員

もう一つの上海絳州鼓楽芸術団の団員からは、もう少し直接話を聞く機会があった（こちらのチームも全員出稼ぎの若者だが、団長がメンバーの一員だというところが違う）。それによると、彼らが太鼓演奏を出稼ぎの業種として選んだ理由は、単調な工場での労働よりも、華やかで格好良いということらしい。実際に話してみて、スポットライトを浴びる自分たちの仕事に誇りをもっていることが、うかがえた（女性の場合は、入団時に容姿が大事な採用のポイントになる）。また、上海という特別な都市で仕事ができることも大きな魅力であるようだ。このため、メンバーのリクルートはそれほど難しい問題ではない。

こう書くと、彼らのことを無邪気に思われるかもしれないが、それが実際に筆者の受けた印象でもある。最年長でもせいぜい二十歳を少し超えるくらいの団員に、「将来はどうするのか」と訊いてみても、ほとんどが「あまり考えたことがない」という答えであった。なお、彼らのほとんどは農家の出身で、仕送りはしたいとは思っていても、なかなかできないというのが現状のようだ。

## ２　アマチュアの太鼓グループ

一説には、上海市にはプロとアマチュア合わせて千チームほどの太鼓グループが存在するというが、そのほとんどはアマチュアのチームだという。そして、アマチュアのグループのほとんどが、「社区」で活動するチームである。社区では、改革開放の一環として1990年代初頭から中高年の趣味的活動が奨励され始めたが、そのひとつに太鼓演奏があるとい

うわけである。ちなみに社区の趣味活動には、他にもダンス、合唱、バドミントン、英会話などがある。参加者はほとんどお金を払う必要がないが、それは活動資金が行政の補助金で賄うことができるためである。参加者は仕事を定年になった人々である（中国では、女性の定年が 50 歳、男性の定年が 60 歳である）。

筆者らが中国で会ったアマチュアの太鼓演奏家は、一人残らずといってよいほど女性だった。その理由を尋ねてみると、中国ではそもそも太鼓を叩くしぐさは女性的なものだと思われているとのことであった。「和太鼓」といえば男性的なイメージが先行する日本とは、かなり違うところである。

写真６　平太鼓の練習風景（黄浦区豫園街道のチーム）

上海のアマチュア太鼓演奏活動には、平太鼓（写真６）、全身を動かしながら踊るようにして叩く腰鼓（写真７）、西洋風のマーチングバンドの太鼓演奏がある。したがって、プロの演奏家たちとは、演奏スタイルがそもそもかなり異なる。実際にステージに立って演奏する場面を見る機会はなかったが、基本的にはテープや CD などの BGM にあわせて太鼓を叩くのだという。レパートリーは、現代的なもの、民族的なもの、時代的なものなど雑多で、劇や歌と組み合わされるものが多い。

写真７　腰鼓の練習風景（右端の男性２人は先生と伴奏者）

筆者らが訪ねたのは、黄浦区豫園（ユーイェン）街道のチームである。メンバーは定年退職した女性が中心で、平均年齢を尋ねると 55 歳くらいだとのこと。退職しているとはいっても、全く暇というわけでもなく、孫の世話や家事で忙しい人も多いという。練習には 20 人弱が集まっていたが、メンバー数は多い時には 50～60 人いたそうだ。普段の活動は週２回の練習で、出演は月２～３回だというから、なかなか忙しいといえる。出演の機会がどういうものかというと、地区で行われる太鼓その他の芸能のコンテストや、会社のオープニングセレモニーである。活動の動機を尋ねてみると、「健康」と「長寿」が圧倒的に多く、これは日本における和太鼓ブームに通じるところがあるように思える。

ところで、筆者らが上海を訪れていた３月上旬は、上海万博の直前であった。これにあわせて上海市は、社区で活動する太鼓愛好者を一堂に集めて、非常に大人数の太鼓アンサンブルを準備していた。筆者らはそのリハーサルを訪れる機会があった。三林地区の市民センターに集まった太鼓演奏者は200人ほどであったが、当然これは全体を構成する一部にすぎない。練習は監督役の男性数名が見守るなかで行われた。演奏は、大音量の BGM にあわせて、全員が基本的にユニゾンの動きで太鼓を叩くというものであった（写真８）。

写真８　上海万博にあわせて練習する市民

## Ⅲ　新絳県（絳州）の太鼓文化

### １　新絳県へ

上海で見ることのできた中国の太鼓文化の現状を、よりよく把握しようと、筆者らが次に向かったのは、山西省運城市新絳県（絳州）である。新絳県は、黄土高原に位置する、人口約 32 万人の県である。すでに述べたように、上海の鼓楽団員の若者のほとんどがそこからの出稼ぎ者である。そのほとんどは、地元の芸術学校か鼓楽の私塾に通っていた経験がある。彼らの多くは農家の出身だったが、どうやら新絳県の若者にとって、出稼ぎで太鼓を叩くというのは一般的な選択肢の一つのようであった。しかも、彼らによると、新絳県では千年に渡って太鼓をたたきながら村をねり歩く祭りが続いており、村の誰もが太

鼓を叩くのだという。

私たちはまず、新絳県北張鎮にある、上海絳州鼓楽芸術団の団員２人の実家を訪ねた。新絳県の中心からタクシーで 30～40 分ほどの村である。農村地帯には、長い日照時間を利用した大きなビニールハウスが、起伏の少ない高原にいくつも見られた。ちょうど収穫時期だったのか、道路には収穫したトウモロコシの実が干してあるのをよく見かけた。北張鎮を訪れたのは日中だったが、どの家庭も比較的のんびりした雰囲気であった。

写真９　北張鎮の様子

村落における太鼓のあり方と演奏スタイルについて、聞き取り調査から分かったことは、次のようなことである。まず、演奏の機会は正月や中元（1 月 15 日）が主なもので、その他には、結婚式や葬式といった儀式や、店のオープニングや共産党関連の大会といったイベントである。出演の人数は約 100 人で、ほぼ全員が女性。30 歳代以上の主婦が中心である。練習は、農閑期に 35～40 人くらいが集まって行う。どの地域にも太鼓の先生がいるわけではないが、北張鎮には少なくとも１人の先生がいる。楽器は太鼓と鉦で、使用する太鼓には西洋式のドラムもある（どちらも胴が赤く塗ってある）。太鼓は各家庭で所有している。レパートリーのなかには、BGM にあわせて演奏するものもある。話を聞いた限りでは、全員がほぼ同じ動きをするようだ。特に練習をしているわけではない人も、簡単な叩き方は知っているようであった。

写真 10　村で使用される太鼓（胴に「北張八組」とある）

筆者としては、村で行われるという祭りや結婚式での演奏がどういうものかを知りたかったのだが、これは映像や写真がなかったので、話だけではあまりよくわからなかった。また、祭りというのを村落が自治的に行っているのか、それとも行政の関与があるのかという点も詳しく知りたかったのだが、これも要領の良い説明が得られなかった。

## 2　政府系の太鼓文化――新絳県の山西絳州鼓楽芸術団

次に筆者らがインタビューしたのは、「山西絳州鼓楽芸術団」の王秦安団長である。ここでようやくはっきりしたのは、王氏が団長を務める山西絳州鼓楽芸術団というのは、上海で接触した２つのチームの母体だということである。

王団長によると、「山西～」の前身は、山西省で行われた最初の「民間芸術祭」に出演するために、1987 年に一時的に結成された、「新絳県農民鼓楽隊」である。県の文化館長だった王氏は、当時からすでに団長として鼓楽隊の面倒をみていた。当時の隊員は全員が農民で、県のあちこちから演奏者を集めた。女性は 4 人のみで、男性は 22 人。太鼓以外にダンスや歌も披露した。翌年（1988 年）に北京人民大会堂で行った演奏が大成功をおさめたことをきっかけに、王氏は新絳県に「山西絳州鼓楽芸術団」を常置することを決めた。

以後、芸術団は、多くの国内外の講演を行っていたが、それらの仕事はほとんど政府を通じてのものであった。2000 年に上海に進出したのは、民間の市場を開拓し、それまで以上の利益を目指したからである。上海での出演の機会は大きく分けて４つ――１）文化祭、会社のオープニングなど；２）夕方から夜にかけての道端パフォーマンス；３）自分たちの劇場での演奏（これが最も重要で常にほぼ満席の状態だったという）；４）他の大劇場への出演――であった。

だが、世界的な不況のあおりを受け、2009 年には上海（そして、それまでに女子のチームが２つあった米国）から撤退した。上海から撤退した理由には、不況以外のこともある。王氏によると、上海では、筆者らがインタビューをした、上海東絳州鼓楽団や上海絳州鼓楽芸術団のような、自分たちのチームの「モノマネ」が多かったからだというのである。つまり、「上海東～」他の「絳州」と名前のつくチームは、自分たちの名前を不当に利用しているというのだ。王団長は、若い女性がノースリーブのシャツやミニスカートで演奏する「水鼓」のことを、「淫らなパフォーマンス」といって、自分たちがそれとは違うということを、何度も強調した。王団長自身は、自分は絳州の伝統的な民族鼓楽を継承し広めたいのであり、水鼓のような演奏は絶対に真似をしないと語った。

その、山西絳州鼓楽芸術団の演目がどういうものか。パンフレットやビデオを見た限りでいうと、「伝統」のイメージが前面に出たものが中心である。すなわち、演奏者は伝統的な衣装をまとい、楽器も、太鼓のほかに鉦や銅鑼を使用する。上海でみたチームとは異なり、西洋楽器は使用しないようである（写真 11）。筆者が後に見たビデオでは、20 名近くの若者が、大小さまざまな太鼓を、かなりの迫力と技術でもって叩くというものがあり、日本の創作組太鼓にかなり近い雰囲気があった。また、雰囲気のあるライティングを使用し、たっぷりと間をとった演奏もあったが、これも日本のプロに近い創作太鼓集団の演奏に通じるところがあると思う（彼らのパンフレットには、日本の鬼太鼓座のトレードマークともいえる、上半身裸で巨大な太鼓に向かう後ろ姿のポーズもある；写真 12）。

写真 11　山西絳州鼓楽芸術団（パンフレットより）

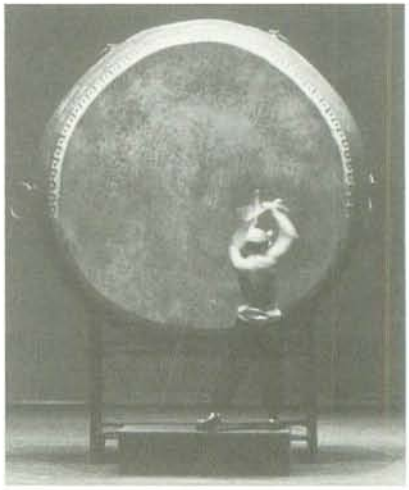

写真 12　同パンフレットに掲載されている広告用写真

現在、山西絳州鼓楽芸術団は、「新絳鼓楽劇」という新しいジャンルのパフォーマンスで、北京の市場を狙っている（一説によると、この新プロジェクトには1千万元〔≒1億3千万円〕が投資されている）。練習の様子を見せてもらったところでは、太鼓に限らない民族楽器を多用した、劇もしくはミュージカルという印象である（写真13）。第一番目の演目として選ばれたのは、古典劇《楊門女将》で、リハーサルを4月から、初演は11月13日という予定であった。振付師には、北京から 20 歳代後半の若い男性の元ダンサーを2人起用しており、彼らはリハーサルのたびに新絳県にやって来る。

山西絳州鼓楽芸術団の現在のメンバー数は 50 数名で、全員がフルタイムで雇われている。全員が新絳県出身で、入団時はほとんどが素人という。練習は不定期だが、チームワークが必要なので、時間のある限り毎日行っている。

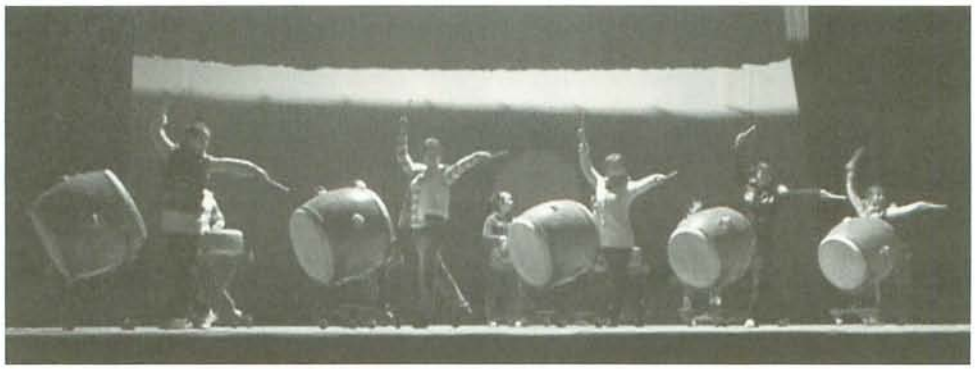

写真 13　山西絳州鼓楽芸術団の鼓劇《楊門女将》のリハーサル風景

### 3　民間系の太鼓文化——鼓楽吹打の私塾

最後に筆者らがインタビューしたのは、個人で太鼓その他の楽器を教えているという、51歳の柴元晧氏である。新絳県三泉鎮南平辰村に住む柴氏は、上海の若い鼓楽団員の口から「先生」として名前があがっていた人物である。多い時は40人、今でも十数人から20人の生徒がいる。これまでの教えた生徒の数は、数百人から千人にもおよぶという（山西省軍隊の文工団〔軍楽隊〕にかつての生徒が15人いることは、彼の自慢である）。柴氏は、一言でいって、山西絳州鼓楽芸術団の設立に尽力したが、その後に王団長と決別したという人物である。

柴氏は、新絳県の農村出身で、若い頃には地方の劇団で働いたことがある。中国の京劇、山西省の晋劇、新絳県の蒲劇や眉戸劇をする劇団で、音楽ディレクターをするなどしていた。1987年に王団長のチームの一員になり、1989年頃には20歳代の後半で専属コーチになった。その後、1997年に、サラリーの問題でトラブルとなり、山西絳州鼓楽芸術団を辞めている。本人によれば、その後もスタッフにならないかと誘われ続けたが、完全に無視してきたのだという。

その後1年間、山西省で映画やドラマの吹打（後述）ディレクターをし、そのさらに1年後に、生徒を集めて教え始めた。生徒は主に農家出身の若者で、中学を卒業をしたが勉強が出来ずに進学できない者たちであった。彼らのなかには、現在山西省の芸術学校などで吹打を教えている者もいる。その後、まずは広州に、続いて上海で4～5年間仕事をして、2009年に新絳県に戻って来た。

柴氏が得意とする鼓楽の特徴は、太鼓にチャルメラや笙を組み合わせているところであり、これが「吹打」（太鼓と吹奏楽器が組み合わされているという意味）と呼ばれるアンサンブルであり、柴氏自身もチャルメラの名手である。柴氏は、民間で行われる結婚式や葬式の演目をヒントに、作曲や編曲を行う（ただし、楽譜に書き記すことはしない）。柴氏は民衆的なルーツ音楽や芸能に関心が高いらしく、筆者らにも1985年に撮影されたという、農村での太鼓演奏（正月もしくは収穫祭のもの）を見せてくれた。このビデオには、かなり荒々しい演奏の様子が収められていたが、柴氏自身もこれを「黄土高原の熱情」と言い、自分たちも「民衆の精神を」表現しようと演奏するのだと話した。

柴氏は、自身のアンサンブルにかなり自信があるらしく、山西絳州鼓楽芸術団の演奏も、現在のものは単調だが、昔はずっと良かったと話した。話を聞いた限りでは、具体的な違いは筆者には分からなかったが、柴氏が過去にかかわったというチャルメラや笙を多用したステージのビデオをいくつか見たところでは、日本の太鼓に通じるところがあると思わされた上海や山西絳州鼓楽芸術団の演奏とはかなり違っていて、楽器のアレンジはずっと多彩という印象を受けた。

現在、上海をはじめとする都会では、結婚式などの伝統的儀礼の場を除いて、チャルメラのような楽器は（おそらくその民衆的なイメージから）嫌われているのだという。だが、柴氏はそうした現実に対して悲観的な様子はなく、むしろ、自らの弟子たちが「水鼓」などの現代的な鼓楽を演奏していることを誇りに思っているようであった。山西絳州鼓楽芸術団に対する対抗意識もあるのかもしれないが、新しいタイプの太鼓演奏に対して否定的な態度が一切ないところが、先の王団長の姿勢との大きな違いである。

写真 14　柴氏の私塾で吹打の訓練を受ける生徒たち

柴氏は、2009 年に新絳県に戻ってきてから、吹打演奏を教えるための私塾を新築した。彼は必ずしも裕福とは思えないが、25 万元（≒300 万円）もの資金を投じて、生徒に住みこみができるようにもしてある（写真 14，15）。生徒はまだ 10 歳代半ばがほとんどだが、練習を見たところ、音楽的な訓練と規律は非常に厳しく教え込まれているようであった。柴氏は、現在の生徒のトレーニングがある程度のレベルにまで達したら、彼らを連れて再び上海に行くつもりなのだという。

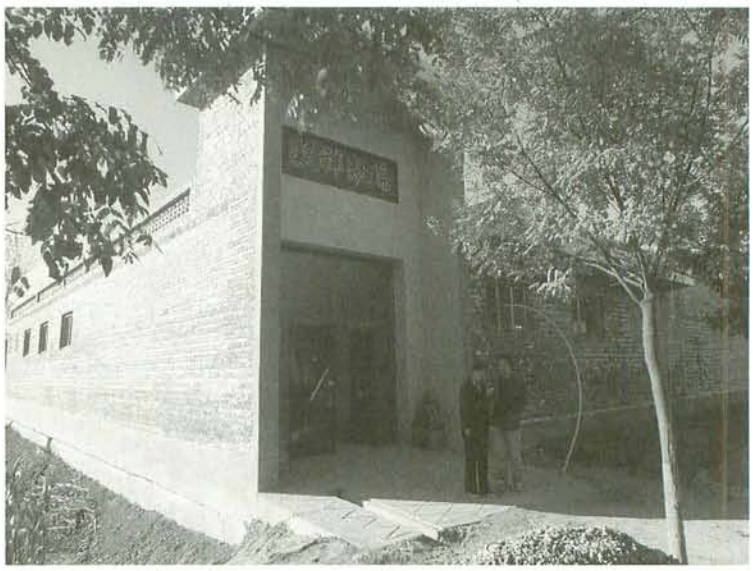

写真 15　柴氏の私塾；生徒の宿舎も兼ねている

Ⅳ　おわりに

### 1　まとめ——中国の太鼓文化の系譜

以上に、短期調査の内容について報告してきたが、ここで現在までで明らかになってきた中国の太鼓演奏集団の系譜は、図１のようなものである。もちろん、これは絳州系の太鼓スタイルのそれに限定されているし、不十分な調査のために、欠落している部分も多いと思うが、ひとまずこの系譜から現在の中国の太鼓文化について分かったことを、以下にまとめてみよう。

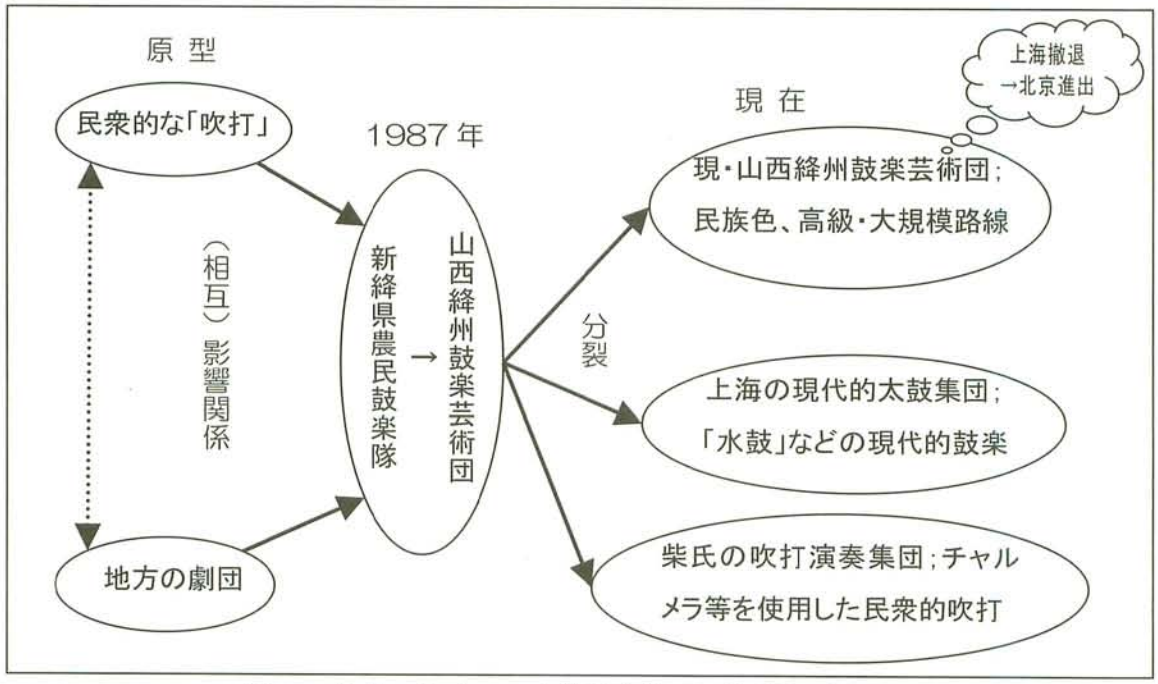


図１　絳州スタイルの太鼓演奏集団の簡単な系譜図

現代的な鼓楽団の先駆けは、1987 年に新絳県の文化館長がマネージャーを務めた「新絳県農民鼓楽隊」であり、これが後に「山西絳州鼓楽芸術団」と名前を変えている。「～鼓楽隊」の基礎となったのは、柴氏のインタビューによると、民衆の祭りなどで演奏されていた「吹打」や地方の劇と考えられるが、これらがどういうものなのかは、いまだ筆者にはつかめていない。

山西絳州鼓楽芸術団は、結成してから２度にわたって分裂を繰り返している。一度目は柴元晧氏の脱退で、これにより演奏スタイルが変化したと考えられる。２度目は上海からの撤退に端を発するものだが、これは、上海で「水鼓」などの現代的な鼓楽芸能と競合したためである（おそらく、このライバル演奏集団の多くは柴氏の弟子と考えられる）。上海から撤退した山西絳州鼓楽芸術団は、多額の資金を投入して、大がかりな舞台劇を準備し

ている。次の市場を北京であり、現代的なミュージカルと民族的な演出を混ぜ合わせたものになっているようだ。

一方の柴元晧氏の鼓楽スタイルは、チャルメラや笙といった、民衆的要素にその特徴がある。もっとも、中国の民族楽器における「高級」や「低俗」のラベルづけについて筆者はまだ分かっていないのだが、「山西～」が狙う高級路線と、柴氏のそれが異なっているであろうことは、判断できた。この２つの鼓楽集団の志向の違いは、「水鼓」のような、現代的・大衆的な趣味にあわせた演奏スタイルに対する評価にもみられる。柴氏とその弟子たちは、現代的なスタイルで演奏することに肯定的であり、「山西～」の方は明らかに反発している。

絳州の山西絳州鼓楽芸術団と、柴氏とその弟子が中心となる上海の鼓楽団との違いは、ターゲットとする市場の違いでもあるのだろう。ミュージカルを大々的に取り入れた鼓楽の新ジャンルを開拓した絳州の鼓楽団が目指すのが、北京だということが、それを象徴しているように思える。詳しく明らかにできたわけではないが、巨額の投資で、民族的な演出の多い大規模な鼓楽劇を作っている彼らが狙っているのは、大衆的な市場ではないことは明らかだろう。おそらく、何らかの形で政府のバックアップを得られるだけのステータスというのが、彼らの目指すところなのではないか。

それに比べると、柴氏の市場はより大衆的である。彼自身も地方の劇団員としてミュージシャンのキャリアをスタートさせたわけだが、「山西～」のディレクターとして新絳県で働いた後の彼の仕事も、テレビ局や映画などの民間会社が中心であった。現在も吹打を指導しているが、あくまで私塾である。また、柴氏の教え子が中心の、上海の若い鼓楽演奏者が相手にしているのは、移り気で自由市場的な大衆である。「水鼓」やポリタンクを叩くというパフォーマンスは、少ない投資と訓練で大きなインパクトを見る者に与えられる演目である。その分、飽きられてしまうか経済が不況になれば、オファーもなくなる類の仕事といえるかもしれない。

### ２　日本の太鼓文化との比較

次に、中国の太鼓文化を日本のそれと比較してみよう。

まずは、上海に見られた太鼓文化が「民俗」や「民族」のカラーからは、かなり自由だという大きな違いがある。上海の太鼓集団は、現代風の BGM に合わせて演奏しながらも「鼓楽団」を名乗っている。そもそも「水鼓」で使用している太鼓は、フロアタム（ドラムセットのトムトムの一つ）のようなものである。また、趣味の鼓楽活動や農村の祭りでも、伝統的な太鼓と西洋的なドラムが併存している。それに対し、現在の日本の太鼓文化はあくまで「和太鼓」文化であり、「民族／民俗」のイメージからは切り離しがたいものだということが、改めて確認できるのである。

また、中国の鼓楽では、BGM や他の楽器が多用されている場合が主である。また、鼓楽は劇や歌と組み合わされて演奏される場合が多いようだ。ここからも、近年の日本における創作組太鼓の演奏が、太鼓に特権的な役割をもたせている独自性が、改めて確認できる。

その一方で、大小の太鼓のみで演奏する演目では、マスゲーム的なユニゾンの身体の動きが主であり、これは日本の創作組太鼓に共通しているようである。また、山西絳州鼓楽芸術団のパンフレットに見られたイメージ写真も、日本の鬼太鼓座のそれと酷似している。ただし、現在のところは、具体的な影響関係については分かっていない。

演奏スタイルとは別の、社会経済的な背景でいえば、中国では太鼓演奏のプロフェッショナルがかなり多いのが特徴である。もちろん、これは上海市に限られることかもしれないが、それらの事例を見た経験からすると、日本のプロの太鼓演奏者と比べて、プロの敷居がずっと低いものという印象を受けた。また、新絳県の山西絳州鼓楽芸術団にしても、地方の自治体が完全にバックアップしていて、さらに巨額の投資まで行われている。伝統の鼓楽のあつかいが、日本でいうところのシンフォニー・オーケストラのようなのだ。

最後に、アマチュアの太鼓演奏家を見ると、日本でいう「趣味活動」との違いがある。日本の太鼓愛好家たちの活動は、そのほとんどが、運営から何から全て自分たちでやるというものである。行政や財団の助成金が使われることはあるが、それらも愛好家たちがグループを作り、自ら申請しなければならない。それに対して中国における鼓楽の趣味は、基本的に全て行政に必要なもの（物品や出演の機会）が支給されるというものである。その一方で、太鼓を叩くことが「健康」や「運動」と結び付けられ、活動の動機になっているあたりは、ある程度日本と共通するところである。

また、プロの演奏家がアマチュアの好みに大きな影響を与えた日本を比べると、中国のプロとアマチュアの間にはそうした影響関係が見られないようだった。両者は芸能のスタイルとしては、全く別のものと捉えられているようである。この背景として気になるのは、上海市の鼓楽芸能の商業色の強さである。筆者がこう言う根拠は、演奏スタイルもあるが、何よりも団員とマネージャー業が完全に分かれているところである。逆に言うと、中国の鼓楽には、日本の太鼓文化にあるある種の「気負い」がないということでもある。

### 3　今後の展望

本節の冒頭では系譜づくりを試みたが、これをより正確に描くには、1987 年以前の村落の祭りや、民衆的な劇についての知識が不可欠であろう。ここを丁寧にカバーすることで、上で仮説的に論じた「高級／低俗」の区別や、日本の創作太鼓との影響関係を、詳細に跡付けることができるであろう。そのためには、まずは文献調査により新絳県の歴史的な背景を明らかにした上での、さらなる現地調査が必要となる。